

AMDА

多様性の共存

ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDА)
<https://amda.or.jp/>
 特定非営利活動法人 AMDА 社会開発機構
<https://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDА 国際医療情報センター
<https://www.amdamedicalcenter.com/>
 AMDА 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

2026 年 7 月 25 日 VOL.49 第 318 号

発行 / AMDА 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2026 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail:member@amda.or.jp

夏号

夏

救える命があればどこまでも

AMDА Journal インタビュー

ウクライナを忘れないで

特定非営利活動法人ユーラシア 副理事長 リリヤ バビィさん

岡山県倉敷市を拠点とする特定非営利活動法人ユーラシアでは、在日ウクライナ大使館指定のもと、救急車や消防車など、日本から寄付された緊急車両をウクライナに輸送しています。AMDА では、岡山県から贈られた車両を輸送する際の費用を一部負担。今回、同団体の副理事長を務めるウクライナ出身のリリヤ バビィさんにお話を伺いました。(聞き手: 難波 妙)

AMDА ウクライナから来日されて 23 年と伺いました。文化や風習の面で、ウクライナとの違いを感じることは?

リリヤ 日本では、「また遊びに来てください」と言われても、実際に訪ねる人はいませんよね。でも、ウクライナの人々は、本当に遊びに行きます。本心にないことを口にすることはあまりありません。また日本では、子どもたちの制服や髪型が学校で細かく決められていることにも驚きました。

AMDА 2022 年 2 月 24 日のウクライナ侵攻以来、私たち日本人には到底想像の及ばない、戦時下の母国に対する苦しい思いがあると思います。

リリヤ 侵攻直後、私は西部リヴィウにいる母と姉に電話しました。「始まったよ」という姉の一言に、言葉が出てきませんでした。二人とも、夫や息子を残して避難などできないと、「絶対に他所へは避難しない」と言いました。ウクライナでは、国を守るため、18 歳以上の男性が国外に逃れることは基本的に許可されていません。母は東部の前線地域から逃れてくる人たちを自分の家に泊めていました。昼夜、絶え間なく続く車の列。その光景は今でも脅威として母の心に刻まれているそうです。

AMDА 昨年、ウクライナに行かれたね。

リリヤ 首都キーウに滞在した 3 日間のうち、最初の 2 日間は、地下の防空シェルターで寝泊まりしていました。3 日目はさすがに疲れが出て、宿泊先の部屋で休んでいたのですが、夜 11 時ごろに空襲警報が鳴り響き、建物の 10 階から駆け下りました。すでに多くの宿泊客が避難しており、とても眠れる状況ではありませんでした。地下 2 階にいても、ミサイルが着弾した時の衝撃波は伝わります。避難している人達同士で、なんとかつながるインターネットで情報を拾い、励まし合い、生き延びました。翌朝、外に出てみると、燃えたあちこちの建物から煙が立ち上り、辺りを覆っていました。その後、リヴィウに向かったものの、到着したその日に攻撃を受けまし



た。攻撃の前には、偵察ドローンが飛来します。その音は原付バイクのエンジン音に似ているのです。シェルターもない中、「どうかここには(ミサイルが)落ちないで」と祈るしかありませんでした。今、このような無差別攻撃が激化しています。多くの市民が犠牲となっています。それでも、人は生きていかねばなりません。

人で溢れかえるシェルターで寝起きし、一度自宅で身支度を整えてから職場に向かいます。市民に仕事がないければ、国も生き残れません。一方、国外に避難していた人たちが、ウクライナに戻ってきているという現実もあります。避難先では、仕事もなく、子どもたちにも中々友達ができないからです。空爆が激しい東部の学校では、地下シェルターを使って授業が行われています。5 月は卒業式のシーズンですが、そんな晴れ舞台でさえ、地下で迎えなければなりません。まるでモグラのような暮らしです。恐怖の感覚が麻痺して、市民はこの状態に次第に慣らされていくのではないかと感じています。

AMDА 今、リリヤさんが日本の人たちに伝えたいこととは?

リリヤ “ウクライナを忘れないで”ということです。この戦争は、ウクライナだけの問題ではありません。“国際法という人類共通の規律を国際社会がどれだけ守り抜けるか”という、「世界の平和な未来」そのものに関わる問題なのです。



日本から寄贈された緊急車両

ウクライナ人道支援活動：現地の声が語るウクライナの今

去る6月、ハンガリーとルーマニアを訪問し、ウクライナ人道支援活動に携わる現地協力団体の関係者から直接話を聞きました。活動の便宜上、ウクライナの団体とは、隣国の国境地帯での面会となりました。今回は、AMDAが支援する『メドスポット』（ハンガリー）、『City of Goodness』（ウクライナ）、『セントミッシェル小児総合リハビリセンター』（ウクライナ）の3つの団体からウクライナ国内における現在の状況を聞くことができました。

■ メドスポット（ハンガリー）

ウクライナ西部の避難所に向けて出発するメドスポットのチームを、ハンガリーの首都ブダペストで見送りました。メドスポットでは、救急車で定期的に同地域を訪れ、巡回診療を行っています。

同行するウクライナ出身の医師は、避難所で出会った50代の元兵士の男性について、家族を支えた自身の父親の姿を重ねながら話してくれました。男性は戦争で負傷した後、糖尿病を患い、足趾を切断。妻とはすでに離別しており、子どもも亡くなった可能性があると言われていました。本人にとっては、“再び戦場へ戻ることが唯一の生き方”でしたが、それも叶わなくなってしまったということです。話をしてくれた医師は、「戦争は人の身体だけでなく、家族や社会とのつながり、生きる意味さえも奪ってしまう」と、無念さを滲ませました。

メドスポットのシュパニク理事長は、「元の住居が破壊され、戻れる場所もなく、薬を買う資金もない避難者は、次第に生きる希望を失っていく」と危惧していました。



巡回診療に向かうメドスポットのチームと

■ City of Goodness（ウクライナ）

ウクライナ西部を拠点とする医療団体『City of Goodness』では、戦禍はもとより、DVや貧困等から逃れてきた女性や子どもたちを受け入れています。その中核施設であり、小児用ホスピスを兼ねる『Butterfly House』には、113人の子どもたちが暮らしています。

今回、創設者のマルタさんが、子どもたちが描いた絵を携え、徒歩で国境を越えて、ルーマニア側まで会いにきてくださいました。同施設の子どもたちの多くは、戦争で親を失ったり、虐待や家庭崩壊が理由で保護されたりした子どもたちです。そのうちの約3割が終末期医療を受けています。

同日も、前線地域から新たに子どもたちが避難してくる予定で、「彼らの誰もが私たちの“butterfly”であり、出迎える際にも、『おかえり』と声をかけている」とのことでした。空爆の激化で子どもの存在が見えなくなっている現状を憂い、戦闘が終結したとしても、子どもたちに関する問題が後回しにされる懸念から、子ども一人ひとりの尊厳を大切にしている様子が伝わってきました。



子どもたちの絵について説明するマルタさん

■ セントミッシェル小児総合リハビリセンター（ウクライナ）



路面に書かれた代表者へのお誕生日メッセージ

AMDAが同じくウクライナ西部で支援しているのが、セントミッシェル小児総合リハビリセンターです。今回、AMDAと活動を始めた当初から懇意にしている代表者らと再会し、無事を喜びました。

医療やリハビリの域を超え、AMDAの支援が、子どもたちが日常を取り戻す機会を創出していることに触れ、“何かしたい”という気持ちを子供たち自身も形にしてくれる”と、彼らからの贈り物の写真を見せてくださいました。このような謝意の表れが、職員にとっては大きな励みになっているようです。

AMDAが提携するもう一つの医療施設『ダイナスティメディカルセンター』は、ウクライナ北東部の前線の都市ハルキウにあるため、今回は面会を見送りました。

各団体が日本の支援者の皆さんに宛てたメッセージをAMDAのSNSで紹介しています。現地からの声が届くよう心から願っています。（難波 妙）

日本とインドネシアの大学生が AMDA マリノ農場で実地研修

AMDA が運営するインドネシア・南スラウェシ州の AMDA マリノ農場において、日本とインドネシアの大学生による体験型学習プログラムが行われました。2026 年 2 月から 3 月にかけて、香川大学、高知大学、愛媛大学、現地ハサヌディン大学から計 29 人の学生が参加し、有機農業や地域社会について学びました。この取り組みは、日尼 6 大学による連携事業『SUIJI』（The Six University Initiative Japan-Indonesia）の一環で、学生が農村に滞在しながら地域の課題や文化への理解を深めることを目的としています。

学生たちは農家にホームステイし、田植えの準備や野菜の栽培、有機肥料作りなどを体験。トマトの苗の移植作業では、根を傷つけないよう注意することで、化学肥料を使わなくても高い収穫量を維持できることを学びました。また有機肥料は、生ごみや籾殻などを何層にも重ね、温度や水分を管理しながら約 6 週間かけて熟成させるという、手間のかかる方法で作られており、その作業工程を学びました。

さらに学生たちは、農業が単なる生産活動ではなく、家族や地域コミュニティを支える循環型の暮らしと深く結び



ついていることを実感しました。農家では、収穫した米を屋根裏で乾燥・保存する伝統的な知恵が受け継がれていました。また、水田を源流近くに配置して化学物質の流入を防ぐなど、有機農業には高度な環境管理が必要であることも学びました。

AMDA マリノ農場では、栄養価の高い原生種の赤米「アセロンボ」を有機で栽培しており、品質維持のため、専用の精米機を使用するなど徹底した管理を行っています。学生たちは今回の経験を通じて、有機農業が地域の自然環境と地域社会に根付いていることを理解し、その可能性と課題について知見を深めました。（近持 雄一郎）

AMDA カンボジア支部 2025 年度活動報告



2025 年度、AMDA カンボジア支部は現地チェンラ大学の医学生らを対象に、若年層の健康と医療をテーマとした青少年フォーラムや、災害医療に関するワークショップを実施しました。これらの活動は、若者の健康意識の向上と、紛争や災害時における地域支援体制の強化を目的としています。

2025 年 7 月、第 8 回青少年フォーラムが開催されました。これは同支部が、チェンラ大学や RCRC 職業訓練センターと共催し、カンボジア国立 HIV/AIDS・皮膚病学・性感染症センター（NCHADS）等の協力を得て開催したものです。医学生や医療ボランティアら 96 人が参加しました。今回のテーマは、「グローバル化と科学技術の進展下における若年層のセクシャル・リプロダクティブヘルス」で、若者の性行動

や性に関する健康問題について理解を深めました。特に、情報が氾濫する現代において、SNS 等からの誤った情報や悪影響からどのように身を守るべきかを取り上げ、主体的に健康管理を行うことの重要性について話し合われました。

さらに 2026 年 2 月には、タイ・カンボジア国境地帯での武力衝突によって避難民が発生したことを背景に、有事におけるヘルスケアを取り上げたワークショップが開催されました。これは、学生やボランティア、大学からの要請を受けて実施されたもので、総勢 82 人が参加しました。専門家による講義では、避難民キャンプで活動する際に必要な知識や、PTSD など心のケアに関する教育が行われました。

また同支部は、今回の件に付随して、国内外から寄付を募り、食料品や飲料水、衛生用品、テントなどの支援物資を複数の避難民キャンプに提供しました。これらの活動を通じて、学生たちは医療支援の実践的な役割と、人道支援の重要性について学びを深めました。（近持 雄一郎）



インド母子保健事業

AMDA は、2014 年より、インド最貧州であるビハール州ブッダガヤにおいて、AMDA ピースクリニック（APC）を拠点に母子保健事業を継続しています。この地域では、経済的困難に直面している家庭が多く、妊産婦に何らかの異常があっても設備が整った医療機関で適切な治療を受けることが難しい状況にあります。そこで AMDA は、「予防」と「問題の早期発見」に重点を置き、地元の産婦人科医による妊産婦健診をはじめ、超音波検査費用の支援や健康教育などの活動を展開しています。



■ 株式会社フェリシモの皆さんが現地を訪問

2023 年より当事業をご支援くださっている株式会社フェリシモの皆さんが 3 月にブッダガヤを訪問されました。同社の板谷智史さんよりメッセージをいただきました。



「インドの APC を訪問し、地域の根深い慣習を変えていく“正しい知識と信頼の力”を肌で感じました。かつては自宅での出産が当たり前で、お母さんや赤ちゃんの命が失われても“仕方のないこと”と諦められていた地域。しかし、現地の伝統を否定せず現代医療と調和させるスタッフの地道な努力により、今や母子死亡率はほぼゼロ、超音波検査率は 100% という素晴らしい変化を遂げています。

特に心に残ったのは、かつては医療に反対していたお姑さん世代が、自ら妊婦を連れてくるほど、口コミで信頼の輪が広がっていること。彼女たちに本当に必要だったのは、単なる物資ではなく、正しい情報に触れられる“安心できる居場所”だったのだと気付かされました。

『日本は妊婦にやさしい国』と感謝を伝えてくれる彼女たちの笑顔に触れ、外からの支援が地域にしっかりと根付き、お母さんと赤ちゃんの命と未来を救っていることを実感しました。この場所を守る現地スタッフの熱量にも、深い感銘を受ける訪問となりました」

■ 当事業インド関係者が来日

2026 年 3 月末、当事業に関わりのあるアジット・シンさんがインドから来日し、岡山にある AMDA 本部を訪問しました。2 週間の滞在中、日本の文化や習慣に触れるとともに、東日本大震災復興支援活動の視察や、AMDA と連携協定を締結している企業への訪問、AMDA 中学生学生会例会への参加などを通じて、AMDA の活動や理念に対する理解を深めました。今回の訪問で得られた経験や知見が、今後のインド母子保健事業のさらなる発展に活かされることが期待されます。



（あるちゃん ジョシ、岩尾 智子）

豪雨復興支援事業について報告（駐日スリランカ大使館）

4 月 20 日、駐日スリランカ大使館を表敬訪問し、クマーラシンハ駐日スリランカ特命全権大使と面会しました。まず大使より、2025 年 11 月に発生したサイクロン「ディトワ」の甚大な被害状況と、国家を挙げた復興への歩みについて改めてご説明をいただきました。これに対し、本年 1 月に AMDA 本部がインド支部と協働で実施した豪雨被害への復興支援について報告しました。医療・食糧・教育の 3 本柱で活動を行ったことに関して、特に次世代を担う若者への「防災研修」に強い関心を寄せていただきました。

「すべての活動が重要だったと思うが、特に若者を対象とした教育支援は、次世代のスリランカを担う人々の心に、AMDA との強い絆を刻む活動となったはずだ」という大使のお言葉を受け、今後もこのつながりを大切に育んでいきたいと強く感じています。（祖母井 利昭）



駐日モンゴル大使を表敬訪問

4月2日、駐日モンゴル国大使館を表敬訪問し、特命全権大使バンズラグチ・バヤルサイハン閣下と面談しました。アルザフガイ・デルゲルマー公使にもご同席いただき、昨年6月にモンゴル日本教育病院で実施した内視鏡技術協力事業について、治療・研修の成果やモンゴル人医師の目覚ましい技術向上を報告しました。また、佐藤理事長のモンゴル国立医科大学客員教授就任や、本年9月に予定している事業計画についても共有しました。

AMDAのモンゴルでの活動は2006年に始まり、今年で20年を迎えます。白内障手術の無償提供や子どもの眼科健診推進事業に続き、内視鏡技術協力事業も2017年から継続して実施してきました。多くのモンゴル人医師とともにさまざまな症例に向き合う中で築かれた信頼は、単なる技術協力を超え、もはや家族のような絆となっています。20年の活動の歴史が、この家族の輪をさらに広げ、絆をより深いものとしながら、次世代へと受け継がれていくことを願っています。(難波 妙)



台北駐日経済文化代表処の李逸洋駐日代表閣下を表敬訪問

AMDAは2009年に台湾の行政院衛生署（現・衛生福利部）と外交部により組織される『TaiwanIHA』（台湾国際医療行動チーム）と協力協定を締結。以来、スリランカへの高圧滅菌器提供、インドネシア白内障手術事業への医師派遣など、多岐にわたるご支援をいただいています。

4月2日に台北駐日経済文化代表処を表敬訪問した際、駐日代表の李逸洋閣下は、こうした協力の歩みを自ら日本語で紹介され、その誠実なお人柄に深い感銘を受けました。続いて、佐藤理事長が、2月にネパールで行われたAMDAダマック病院での内視鏡技術研修について報告しました。首都カトマンズから約700キロ離れた同病院では、台湾から内視鏡の寄贈を受けており、これまで多くの地域住民が検査や治療を受けています。今回の研修には近隣病院の医師を含む8名が参加し、大腸がん診断やポリープ切除など、高度な治療の実技指導が行われました。今後も地域医療の向上を目指して、双方による更なる連携が期待されます。(難波 妙)



令和8年 岩手県大槌町山林火災緊急支援活動



確認しました。さらに地域の自治会、医師会、社会福祉協議会の関係者らと面談を重ねた結果、生活上の大きな不便は解消され、緊急の医療・物資支援ニーズも収束に向かっていることを確認できたため、現地での緊急対応は不要と判断し、活動を終了しました。

皆様との面談を通じ、東日本大震災で培われた協力体制の輪が、さまざまな場面で活かされていることを改めて実感しました。今後も関係諸機関との連携を維持し、必要に応じた支援ができるよう備えてまいります。(祖母井 利昭)

岩手県大槌町で発生した山林火災に伴い、4月28日から29日にかけて、岩手県大槌町の災害対策本部および元AMDA大槌健康サポートセンター(佐々木賀奈子センター長)をAMDA本部から2名で訪問しました。当日は降雨により鎮火に向けて事態が大きく好転したものの、町全体にはまだ焦げた匂いが漂っており、緊迫した状況を肌で感じました。前日まで、多くの家庭ではホースで自宅へ水をかけるなど懸命な作業が続けられており、住民の方々からは喉の痛みや消火活動による疲労を訴える声が多く上がっていたようです。

翌29日には自治体の調整本部会議に参加し、避難所の環境が改善され、支援体制が充実していることを



現在ご寄付受付中の活動

*緊急救援 *ウクライナ人道支援 *AMDA フードプログラム *ルワンダ学校保健
*カンボジア *ネパール医療支援 *インド・AMDA ピースクリニック *内視鏡技術移転
*AMDA 中高生会 *こども食堂支援 *災害事前対策



ボランティアふれあい交流会を開催



知っていただく機会となりました。

その後は、AMDA が活動する国・地域のお菓子や飲み物をご試食いただきながら、ボランティアの皆様、職員、AMDA グループの菅波代表を交えた楽しい歓談のひとときを過ごしました。

AMDA の活動は、人道支援の現場だけでなく、事務所でさまざまな業務においてもボランティアの皆様のお力に支えられています。今後も皆様とともに活動を進めてまいります。(安孫子 芙美)

5月26日、日頃から AMDA の本部事務所で活躍いただいているボランティアの皆様と AMDA 職員との交流会を開催しました。20代から90代まで、幅広い年代のボランティアの皆様にご参加いただき、大変盛況な会となりました。

交流会は参加者全員による自己紹介からスタート。その後、職員によるネパールでの活動報告を行いました。AMDA が活動する現場の様子をお伝えすることで、AMDA について改めてボランティアの皆様



『連合岡山 東部地協 2026 ふれあいメーデー』に出展

4月29日、岡山市にある北長瀬未来ふれあい総合公園芝生広場で開催された『連合岡山 東部地協 2026 ふれあいメーデー』に出展しました。当日は、200人以上の方々に AMDA のブースへお越しいただきました。ブースでは、AMDA の活動紹介パネルを用いた子ども向けのクイズを実施し、景品として防災食やお菓子をプレゼントしました。

来場者の方々からは、「AMDA の名前は聞いたことがあったけれど、実際に活動している国や地域については初めて知った」といった感想も寄せられ、多くの方に AMDA の活動を知っていただく貴重な機会となりました。

当日は、日頃から AMDA の活動を支えてくださっているボランティアの皆様や、AMDA 中学高校生のメンバーも会場に駆けつけ、展示パネルの説明やクイズ景品の配布など、運営をサポートしてくださいました。皆様のご協力により、イベントは盛況のうちに終了しました。(安孫子 芙美)



熊本地震から 10 年

2016年4月に発生した熊本地震の際、AMDA は震源地である熊本県益城町にて緊急医療支援活動を行いました。AMDA の救援チームは、4月14日に起きた一度目の地震の直後より、町立広安小学校を拠点に活動を開始。その後、16日の本震に見舞われながらも、1ヶ月間、同校にて医療支援を行いました。

これと並行して、AMDA は、町内の避難所が閉鎖される10月まで、益城町総合運動公園(町民グラウンド)において、災害鍼灸支援を実施しました。翌年の7月には「支える人を支える」プロジェクトとして、同じく町役場の職員の方々を対象とした鍼灸支援活動を8ヶ月間にわたって行いました。

去る1月31日、震災から10年の振り返りの意味も含め、益城町主催の総合防災訓練が開催されました。AMDA は、当時の活動を紹介するパネルや動画を展示。会場では、当時救護所を利用した子どもたちや、支援に携わったボランティアの皆様、医療関係者の方々との再会がありました。「やっと、ここまで来ました」という西村博則町長の一言に、復興への長く厳しい道のりや、町民の努力、支え合いの積み重ねが凝縮されているように感じました。(難波 妙)



西村博則町長(写真中央)

AMDA 中学高校生会 4、5 月定例会

AMDA 中学高校生会（中高生会）では、毎月一度定例会を行っています。新年度のスタートとなる 4 月の定例会では、佐藤理事長とのセッションを実施。新しいメンバーに AMDA に親しみをもちてもらい、今年度の活動に向けてメンバー全員が士気を高めました。

セッションでは、佐藤理事長がいくつかの数学の問題を出題し、数学的思考で物事を考えることの重要性を説明。これを切り口に、人生において数学者の秋山仁理事から深い影響を受けたことや、人道支援の道に進んだ経緯等について話しました。

自ら人生を切り開いてきた佐藤理事長の経験談は、メンバーにとって、今後のボランティア活動のみならず、自身の将来について考える良い機会となりました。

また 5 月の定例会では、今年度の活動の軸となる「防災」と「子ども食堂」をテーマにディスカッションを実施。グループに分かれて子ども食堂について学び、その後、防災面で子ども食堂が果たす役割や、災害時における課題などについて議論しました。その上で、防災の観点から、自らが子ども食堂のためにできることを考えました。中高生会では、今後も中高生ならではの視点を活かして、防災への取り組みを進めていきたいと考えています。（勢島 康士朗）



AMSA Japan 主催『JaMSC』に菅波前理事長らが出席

全国の医療系学生の団体『AMSA Japan』（アジア医学生連絡協議会日本支部）が主催する学生向けの交流イベント『第 4 回 JaMSC in 岡山』が 5 月 4 日から 6 日にかけて行われました。今回の催しは、「設立から 40 年を過ぎた今、AMSA の原点である岡山に集まろう」という思いから、初めて岡山で開催されました。

AMSA は、AMDA の菅波前理事長が 1980 年に設立した団体です。ここで培われた国内外の医学生とのつながりが、AMDA としての世界規模での人道支援活動へとつながっていきます。

開会式には、来賓として岡山県医師会の松山正春会長をはじめ、菅波前理事長も出席。「AMSA を通じてさまざまな人と交流し、世界に通用する知恵を身につけ、今後の人生に役立ててほしい」とあいさつしました。またこの日は、AMDA 中学高校生会のメンバー 5 人もイベントに参加しました。



南海トラフ巨大地震に関するワークショップでは、発災時に避難所などで想定される課題やその状況下で実施可能な活動について、医療者を志す立場から学生たちが活発に意見を交わしていました。その後で、AMDA の佐藤理事長が講演。自身の緊急人道支援活動の経験を踏まえ、医療者として世界の現場にどのように向き合うべきかを学生たちに伝えました。（勢島 康士朗）

三井住友信託銀行でパネル展示



2026 年 4 月 6 日から 5 月 1 日にかけて、三井住友信託銀行岡山支店ならびに岡山中央支店のロビーにて、AMDA の活動を紹介するパネルを展示させていただきました。

毎日多くの方が行き交う銀行のロビーという場所で、国内外での医療支援や被災地での活動をお伝えする貴重な機会となりました。普段 AMDA の活動に触れる機会の少ない方々にも、パネルを通じてその歩みや理念をお届けできたことを、大変嬉しく思っています。展示をご覧になり、AMDA の活動に温かな関心を寄せてくださった方もいらっしゃいました。

AMDA の活動に対するご支援の選択肢の一つとして、「遺贈寄付」があります。遺贈寄付とは、個人が遺言によって遺産の全部、または一部を、NPO 法人等の団体や機関などに寄付することをいいます。「人生の締めくくりに、誰かの役に立ちたい」とそのような思いを形にする手段として、近年注目が高まっています。三井住友信託銀行では、AMDA に対する遺贈寄付に関するご相談も受け付けています。ご関心をお持ちの方は、ぜひご相談ください。（平島 美緒）